



TITLE:

泌尿器科領域における
Sinequan(doxepin
hydrochloride)の使用経験

AUTHOR(S):

斎藤, 宗吾; 陣内, 謙一; 池村, 紘一郎

CITATION:

斎藤, 宗吾 ...[et al]. 泌尿器科領域におけるSinequan(doxepin hydrochloride)の使用経験. 泌尿器科紀要 1972, 18(2): 101-104

ISSUE DATE:

1972-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/121345>

RIGHT:

泌尿器科領域における Sinequan (doxepin hydrochloride) の使用経験

鹿児島大学医学部泌尿器科学教室

齋藤 宗吾
陣内 謙一
池村 絃一郎

USE OF SINEQUAN (DOXEPIIN HYDROCHLORIDE) IN UROLOGY

Sogo SAITO, Kenichi JINNAI and Koichiro IKEMURA

*From the Department of Urology, Faculty of Medicine,
Kagoshima University, Kagoshima, Japan*

Sinequan (doxepin hydrochloride) was administered to 8 psychosomatic condition with difficult urination, 19 bladder neurosis, 8 enuresis, 12 psychogenic impotence, 5 sexual neurosis, and 4 psychogenic orchialgia. The daily dosage was 30 mg (t. i. d.). The young enuretic patients received only 10 mg before sleep.

In general, satisfactory clinical response was obtained. No side effects were observed except for slight thirst and drowsiness in a few patients.

はじめに

一般に、器質的病変があればそれに応じた身体症状が発現するが、このさい心因性要因が大きく影響して心身両面の症状を悪化させる場合は少なくない。また心因性の原因で、あたかも器質的病変に由来すると思われるような身体症状を呈する場合、あるいは心身双方の原因が想定されてひとつの疾患を形成する場合もあって複雑である。

泌尿器科領域においても、かかる病態をしめす疾患を経験することがしばしばある。尿路系では膀胱神経症、夜尿症、また前立腺肥大症のごとき排尿障害にもとづく精神身体症状などがあり、男子性器系ではインポテンツ、性的神経症、心因性睾丸痛などが代表的な疾患である。

今回 Pfizer 社により開発された Sinequan (doxepin hydrochloride)¹⁾ の提供をうけたので、本剤の主として抗うつ、抗不安・緊張作用

を期待して6種類の泌尿器科疾患に使用したのでその結果を報告する。

対象症例および投与方法

症例は鹿児島大学附属病院泌尿器科を受診せる患者で、Table 1のごとく排尿困難に伴う精神身体症状をしめす8例、膀胱神経症19例、夜尿症8例、心因性インポテンツ12例、性的神経症5例、心因性睾丸痛4例の合計56例である。投与方法は原則として、本剤の比較的少量を使用することにし、1日量を30mg

Table 1. 対象疾患と症例数

疾	患	症例数
排尿障害に伴う精神身体症状		8例
膀胱神経症		19例
夜尿症		8例
心因性インポテンツ		12例
性的神経症		5例
心因性睾丸痛		4例
合	計	56例

(doxepin 塩として)とし、10 mg 錠を1日3回内服せしめた。とくに夜尿症は若年者もあるので1日1回、10 mg 錠を就寝前に投与した。

使用成績

1. 排尿障害に伴う精神身体症状 (主として前立腺肥大症)

症例は Table 2 のごとく8例で、年齢は59才から78才にいたる高齢者で1例の尿道狭窄をのぞき他の7例はすべて前立腺肥大症である。aging による生理的機能低下、例えば腎機能低下による夜間頻尿、下部尿路通過障害による排尿困難に由来する残尿、頻尿のため夜間睡眠不足、疲労の要因が加わり種々の精神身体症状が出現する場合が多い。排尿困難に対する泌尿器

科的治療をおこないながら、本剤を併用して、随伴する精神身体症状の早期改善を期待した。

判定規準として、精神症状を“元気がない”、“ゆううつ”、“老化意識”、“病識”、“仕事に対する無気力”の5項目を設定し、これらのうち3項目以上の改善を有効とし、とくに身体症状としての食欲、睡眠、性欲の3項目のうち2項目以上の改善がみられたものを著効として判定した。

結果は Table 2 のごとくで、8例中著効4例、有効1例で有効率62.5%であった。本剤の投与により、精神身体症状の改善が早期にみられる傾向があった。

2. 膀胱神経症

頻尿、排尿痛、残尿感、排尿時の不快感などを主訴とするが、尿に他覚的所見なく、膀胱鏡的にも異常を

Table 2. 排尿障害に伴う精神身体症状

症 例	年齢	性	疾 患	効 果	投与期間(日)	副作用	併 用 薬 剤	判 定
1 MK	59	男	前立腺肥大症	2/5 0/3	3 T×14	(-)	ウブレチット セルニルトン ブジー	無効
2 FK	76	男	尿道狭窄	2/5 1/3	3 T×7	ねむけ	エビプロスタット	無効
3 IR	59	男	前立腺肥大症	4/5 2/3	3 T×14	(-)	(-)	著効
4 UT	78	男	前立腺肥大症術後	5/5 2/3	3 T×50	(-)	(-)	著効
5 KM	76	男	前立腺肥大症	3/5 2/3	3 T×14	(-)	エビプロスタット ビタミンB ₁	著効
6 MT	59	男	前立腺肥大症	3/5 2/3	3 T×7	(-)	ゲスターゲン	著効
7 KE	66	男	前立腺肥大症術後	3/5 1/3	3 T×21	(-)	(-)	有効
8 KN	61	男	前立腺肥大症	2/5 2/3	1 T×84	(-)	ゲスターゲン エビプロスタット	無効

Table 3. 膀胱神経症

症 例	年齢	性	投与期間(日)	副作用	併 用 薬 剤	判 定
1 TA	18	女	3 T×2	ねむけ	サルファ剤 ウロビリジン	無効
2 IW	60	女	3 T×10	(-)	(-)	有効
3 MI	45	女	3 T×7	(-)	サルファ剤 ウロビリジン	有効
4 TO	29	男	3 T×7	(-)	(-)	有効
5 IW	32	女	3 T×9	(-)	(-)	有効
6 HI	37	女	3 T×9	(-)	卵胞ホルモン	無効
7 YA	50	女	3 T×6	(-)	卵胞ホルモン	無効
8 UA	30	女	3 T×14	(-)	(-)	有効
9 MI	60	女	3 T×14	ねむけ	(-)	有効
10 YA	57	女	3 T×7	口渇	サルファ剤 ウロビリジン	無効
11 SI	51	男	3 T×14	(-)	(-)	有効
12 IJ	46	女	2 T×10	(-)	(-)	有効
13 MI	23	女	3 T×30	(-)	(-)	有効
14 HA	36	男	3 T×14	(-)	サルファ剤 ウロビリジン	有効
15 YO	45	女	3 T×12	(-)	(-)	無効
16 SU	60	女	3 T×14	(-)	サルファ剤 ウロビリジン	無効
17 KO	43	女	3 T×7	(-)	サルファ剤 ウロビリジン	有効
18 HA	25	女	3 T×3	ねむけ	(-)	無効
19 UT	46	女	3 T×12	口渇	(-)	有効

みとめない症例を対象として本剤を投与した。年令は18才から60才にわたり総数19例で、男女比は3対16で圧倒的に女子に多い。主訴とした自覚症状がすべて消失したものを有効と判定し、部分的消失ないし副作用を訴えて他剤に変更したものはすべて無効と判定した。結果は Table 3 のごとくで19例中有効例は12例(63.2%)にみられ、7例は無効と判定された。

3. 夜尿症

外来検査で器質的原因を除外した夜尿症患者8例に使用した。年令は若く6才から20才で、本症は1日1錠(10mg)、就寝前に投与した。本剤内服により、夜尿の消失したもの、あるいは明らかに夜尿日数の減少したものを有効とした。結果は Table 4 にしめしたごとくで8例中4例(50.0%)に効果がみられた。他の3例は無効で、1例の経過はその後来院せず不明である。

Table 4. 夜尿症

症 例	年 令	性	投与期間(日)	副 作 用	併 用 薬 物	判 定
1 TO	15	男	1 T×30	(-)	(-)	有 効
2 KA	18	女	1 T×35	(-)	(-)	無 効
3 NA	20	女	1 T×10	(-)	(-)	無 効
4 TA	7	女	1 T×14	(-)	(-)	無 効
5 FN	17	女	1 T×48	(-)	(-)	有 効
6 UR	12	女	1 T×7			不 明
7 OG	6	男	1 T×21	(-)	(-)	有 効
8 MA	14	男	1 T×20	(-)	(-)	有 効

4. 心因性インポテンツ

直接、性器系に關する器質的变化はなく、種々の外因が加わって発現したと思われる心因性インポテンツ症例12例に本剤を投与した。年令は27才から55才にわたり、主として勃起不全を主訴とした。かんたんな精神療法すなわち器質的原因ではないことを説得して、本剤を単独投与した。結果は Table 5 のごとくで、12例中7例(58.3%)に効果のみとめた。効果の判

Table 5. 心因性インポテンツ

症 例	年令	外 因	投与期間(日)	副作用	効果
1 KI	52	疾患懸念	3 T×14	(-)	有効
2 EH	32	新 婚	3 T×28	(-)	有効
3 TA	30	新 婚	3 T×14	(-)	無効
4 NO	45	外 傷	3 T×28	(-)	有効
5 UH	55	外 傷	3 T×7	(-)	不明
6 NK	33	新 婚	6 T×21	(-)	有効
7 IU	39	外 傷	3 T×14	(-)	不明
8 MA	28	新 婚	3 T×14	口渴	無効
9 KU	42	疾患懸念	3 T×7	(-)	不明
10 HA	27	外 傷	3 T×14	(-)	有効
11 SA	55	不 明	3 T×14	(-)	有効
12 OG	30	外 傷	3 T×14	(-)	有効

定については、性欲、勃起、射精の状態、性交回数など、鹿大泌尿器科教室における基準を採用した^{2,3)}。いずれも性交可能となり、かつ比較的短期間に好結果を得たことは注目に値する。無効2例、その後来院せず

過不明のもの3例である。

5. 性的神経症

陰茎、睾丸、陰毛など genital area の形態的異常を過信、懸念し、神経症症状を訴えるもので比較的若年者に多い。他覚的には異常のないいわゆる性的神経症患者5例に本剤を投与した。インポテンツ患者同様、器質的異常のないことを説明してのち、本剤を投与した。Table 6 にしめすごとく全例をつうじて投与期間が短い、5例中2例は有効と判定された。他の3例はその後来院せず経過は不明である。

6. 心因性睾丸痛

Table 6. 性的神経症

症 例	年令	投与期間(日)	副作用	効果
1 KU	17	3 T×7	(-)	不明
2 FK	20	3 T×7	(-)	有効
3 SI	30	3 T×7	(-)	不明
4 HS	39	3 T×5	(-)	不明
5 KU	23	3 T×10	(-)	有効

Table 7. 辜 丸 痛

症 例	年令	投与期間(日)	副作用	効果
1 KI	33	3 T×5	(-)	不明
2 TA	31	3 T×28	(-)	有効
3 YU	26	3 T×12	(-)	有効
4 IE	27	3 T×7	(-)	不明

器質的に睾丸、副睾丸、精管に異常をみとめず、睾丸の牽引痛を主訴とする患者4例に本剤を投与した。Table 7のごとく4例中2例は12日、28日投与で睾丸痛は完全に消失した。他の2例は5日、7日の投与後来院せず脱落し、経過は不明である。

ま と め

前立腺肥大症を主とする排尿困難に基因する精神身体症状、器質的変化がなく膀胱症状を訴える膀胱神経症、夜尿症、心因性インポテンツ、性的神経症、心因性睾丸痛など、心因性の要因が関与する6種の泌尿器科疾患を対象としてSinequanの効果を検討した。

1. 前立腺肥大症など尿路通過障害による排尿困難のおよぼす心因的影響は大きく、多くの患者において老化意識はつよまり抑うつ状態になる傾向がある。本疾患に対するSinequan投与の目的は泌尿器科的治療に併用し、患者の抱く不安、抑うつ感を除去し、随伴する精神身体症状の早期改善を期待することである。本剤の抗コリン作用を考慮してとくに前立腺肥大症には排尿異常に関して注意深く観察したが、われわれの使用した1日30mg投与ではreverse effectはなく、8例中5例に目的を達した。無効と判定した症例でも5項目の精神症状のうち2項目は改善し、全例において本投与量では悪影響はみられなかった。

2. 頻尿、排尿痛、排尿後不快感、残尿感などは、細菌性膀胱炎で代表される膀胱症状であるが、膀胱機能は心因的影響を受けやすく、かかる症状を訴えるものなかにはなんら器質的病変のみられないものがある。すなわちemotional tension, anxietyなどに基因するもので、とくに婦人に多い。ホルモン異常、月経、性交

なども誘因となるが、誘因の明らかでない場合も少なくない。このような膀胱神経症に対する効果は19例中12例(63.2%)に有効で、本剤の適応疾患と考える。

3. 夜尿症の原因は複雑であるが、外来患者で器質的病変のみられない8例に投与したが、1日1回投与で4例に夜尿の完全消失または回数のおきらかな減少がみられた。

4. インポテンツを主訴とする患者の約70%は心因性のもので、これら器質的変化のない心因性インポテンツ12例に本剤を投与した。これらの患者は性器系に対するanxiety, fear, doubtをもち、psychoneuroticな背景が主因となっているもので、本剤の効果がもっとも期待される疾患である。12例中7例(58.3%)に効果がみられpotencyを回復したことは注目に値する。投与期間を延ばし、定期的に説得支持すればさらにより治療結果が得られるものと思われる。

5. 性的神経症、睾丸痛なども明らかに心因性のもので、従来、説得療法を主体としたが、本剤の抗不安作用はわれわれの説得療法を容易にするものと考えられる。

6. われわれの投与量は比較的少量のためか、副作用は56例中7例に口渇あるいはねむけがみられたにすぎない。いずれも軽度で障害はなかった。

文 献

- 1) 台糖ファイザー株式会社編：サイネカンの参考資料，1969.
- 2) 斎藤宗吾：ホと臨，18：9，1970年.
- 3) 牧角 格：日泌尿会誌，59：1，1968年.

(1971年12月3日特別掲載受付)